
銀魂～鬼刃の日常～

美緒奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂〜鬼刃の日常〜

【Nコード】

N9933X

【作者名】

美緒奈

【あらすじ】

真選組に入隊した彼女の笑える物語！気軽に立ち寄ってください

< ^ ^ >

第一話初めはやっぱりこんなものでしょ？（前書き）

初めての投稿ですので少し甘めにみてやってください。

第一話初めはやっぱりこんなものでしょ？

やっと・・・やっと会える…江戸往きの列車の中で彼女はそうつぶやいた・・・

・・・ところ変わってここは幕府特別武装警察真選組屯所である。
今日この屯所ではあるうわさで持ちきりだった。

「なあ、知ってるか？あのうわさ。」

「ああ、なんでも女隊員が来るんだろ？」

「副長の知り合いらしいけど・・・美人かなあ」

「いや、どうせコネで来るんだしブスに決まってるだろ。」

「それもそうか。」

なんてうわさしてる中さっき名が挙がった真選組副局長土方十四郎はいつも以上に眼を吊り上げいらだっていた。

「あいつ遅すぎだろ。10時には江戸に着くつつつってたのに・・・」
イライラ

「まあ、落ち着けトシ。初めての街なんだ。少しぐらいいいじゃねーか。」

そう言って二カッと笑ったのは局長の近藤勲である。局長になだめられたらさすがの土方も黙るしかない。「ったく・・・」あきらめたようにタバコの煙を吐いた。

第一話初めはやっぱりこんなものでしょ？（後書き）

どんな短い感想でもいいですのでお願いします。

第二話ヒロイン登場!!です。(前書き)

なんか前回読み直したらすごく中途半端でした・
読んでくださった方申し訳ございません<++>

第二話ヒロイン登場！！です。

ーここは江戸歌舞伎町の一角にある某コンビニである。

ここに少し変わった男が入ってきた。その男は銀髪で、死んだ魚のような目そして和と洋が混ざったような妙な格好をした・・まあ言わずと知れた万事屋銀ちゃんのおーナー坂田銀時である。

いつもだるそうな顔をしているが今日はいつものにも増してダルそうにしていた。

「ハア・・ったくなんだよ、ちよつと出遅れただけでもうないなんて・・俺のジャンプ。まったくこんな直射日光ガンガンの日によろ嫌がらせですかコノヤロウー。」

グチグチいいながら本売り場まで行くと目の前にあった。

最後の一冊が。

「あっ・・あつたあああ！！俺のジャンプ！！」

目を輝かせ飛びつこうとした時、手がニユツと伸びてきてジャンプを取ってしまった。

驚いてばつとその方向を見ると女性がジャンプを持っていた。

前髪で隠れてよく見えないが若そうだ。

「あのーねーちゃん？ちよつといい？」話しかけると

「何ですかあ？」ニコツと笑いながらこちらを向いた。

ブシャアアアア・・・その女性が想像していたよりもずっとかわいかったからか

それともいきなり極上スマイルを向けられたからだろうか・・いやまあ日光の当たりすぎだからかもしれないが・・銀時は情けなくも鼻血を出して倒れてしまった。

「いやあ、もちもち、悪いねえ。もちもち」鼻にティッシュをつめながら銀時は言った。

あの後彼女は倒れた銀時を引っ張って外に連れて行き手当をしてくれたうえ団子をご馳走してくれるというのだ。

「いえいえ、あたしが坂田さんのジャンプを取っちゃったからショックで倒れちゃったんだし・・気にしないで。」そう言ってニコツと笑った。

（うっそんな理由じゃあねーんだけど・・）

「あっそういやあんた名前は？それにこの辺じゃあみかけねえ顔だかどっから来たんだ？」

「ん？あたしの名前はね・・」

「キタカワセイホ？それが今日新しく入ってくる女隊士の名前ですかい？土方さん。」

「ああ、俺のむかしのなじみでな。」そのころ真選組屯所では土方が一番隊隊長の沖田総悟となにやら話していた。

「ふうん・・ほんとに女なんですわい。じゃああのうわさはほんとなんですわ？」

「ああ？うわさ？」

「ええ、土方さんの昔やっちゃった女を真選組で面倒見なくちゃなんねえって言う・・」

「あほかぁ！！んなわけねえだろうが！誰だあそんなふざけたうわさ流したやつわ！！切腹だぁ！！」

「誰って・・そりゃあもちろん・・俺でさあ。」

「やっぱりか！そうだと思ったわ！」

「だって女なんかぜってえ入れなさそうな土方さんが入れるって事はそんな理由かと・・違えましたか？」

「違うに決まってるだろうがっ！」

「ええ〜。」「ええじゃねえよ！」そんなことを言っていると近藤が部屋に入ってきた。

「やめろ総悟。」入ってくるなりまじめな顔してそう言うのでフオーンしてくれるのかと思えばこう続けた。

「いいか、総悟。男ってのは時にはどうしても責任をとらな・・・」

「んなわけねえだろがああ!!」思い切り近藤をなぐってからふと思った。

(ぜんぜん進まねえなあ・・・)

第二話ヒロイン登場!!です。(後書き)

ほんとに進みませんね・・

第三話口にものがはいつてるときはしゃべっちゃダメ！（前書き）

今気づいたのですが読みにくいですね・・

書き方を付けます！！

後、また団子屋に戻ります。

第三話口にものがはいってるときはしゃべっちゃダメ！

土方達が屯所で騒いでるころ・・・

歌舞伎町のある団子屋に二人の男女が大声で争っていた。

通りすがりの人々は恋人同士のけんかかとも思うだろう。

こんな会話をしてると思わずに・・・

「だーかーらージャンプで今いきがいいのはやっぱりぬ○りひよ○の孫だって！」と女性Ⅱ星螢が言う。

「いーや違うね！それもいいけど一番はめ○かボツ○スだろ！なんたってもうすぐアニメ化すんだからな！のりに乗ってるって。」と男性Ⅱ銀時は言う。

「でもぬ○りひよ○はもうかなりやってるんだよ？アニメってのは始まってからが大変なんだから」

「いやいや、ぞうだけどぼ・・・」

「ってだびじょぶぶ！？」

まあ、すぐに大声をだし過ぎて二人共声ががらがらになってきたので一旦休戦することになったが：

その後お茶を飲んでいると

「へっ・・・へくしょん!!!!」

「んっ、大丈夫か？」

「んっ誰かうわさしてるのかな？」

「で、マジなのか？真選組に今日入隊するってゆうのは。」

「そうだよー北河星螢ちゃんめちゃくちゃ強いんだからー。」

ニコニコしながら細い腕に力こぶを作ろうとする彼女を見ながらさらに質問をした。

「てかよう、あそこって女は入れんのか？一人もいねーだろ。」

「トシくんが入れてくれるって言ってたもん！まあ、こういうコネがなくちゃ無理だと思うけどね」

お茶をすすりながら答える。

トシってあいつのことだよなーと、面白くないと思いながらやっぱモテルからこんな知り合いがいるのかとも思う。

そこで疑問がわいた。

「第一さ、何であんなむさくるしいトコ入ろうと思ったわけ。あん

たならアイドルとかでもなれると思うぜ。」

「えゝそんなわけないよゝアイドルってかわいくないといけないんだよ?」

「あつあのなあ・・・」まるで自分はいかにもいかに言う星蜚にツツコミを入れたくなる。

なんだって、こげ茶色の美しく長い髪、驚くほどに白い肌、スタイル抜群で銀に輝く大きな目

ここまで誰もがうらやむ物を持ちながらそういわれると皮肉にしか聞こえない。

「まあ、いいけどよ・・・そだお前今日いかねえとなんねーんだろ? まだ時間いいのか?」

しばしの沈黙。

「あ・・・ああああああ!!!」そして絶叫。

あわてて耳をふさぎながら銀時は? 然とする。

「どどどどうしよう!!! 10時に来いって言われてたんだつたゝゝおっ怒られる!」

そこまで言うとはっと銀時のほうを向き直り早口で言った。

「ごめん! あたしもう行くね! それじゃまた今度!」

そこまで言いあつという間にはるか向こうに走っていった。
あつという間でしばらくポカンとしてたがやがて重大なことに気が
ついた。

「団子代もらっていない・・・。」

第三話口にものがはいつてるときはしゃべっちゃダメ！(後書き)

こんなもんでどうでしょう？

次は、土曜日に更新したいと思ってます。

ご感想お願いします。

第四話鬼の剣刃いざ参らん！（前書き）

うう・・読み仮名の書き方がわかりません・・
誰か教えてください< ; ; >

第四話鬼の剣刃いざ参らん!

コツ・・コツ・・コツ・・

男は逃げていた。

ーやばい・・やつが来る・・やつが・・

男は疲れていた。上の者にひたすら酒を飲ませゴマをすり・・もちろん自分も飲んでいた。

そして憔悴しきったところに奴等はやってきた。

ー悪魔だ・・あいつは悪魔なんだ・・

男はまださつき自分の身に起こったこと二いまいち現実味を持てなかった。

奴等は宴会場にいきなり入ってき仲間を次々と斬っていった。

誰が言ったんだろう。逃げろ、と自分が言ったのかもしれない。

やつは最初はおとなしかった。だがやつは一人の・・そう一人の悪魔が傷つけられた時に変貌した。頬に銃弾がかすっただけの傷だった。

ほかの悪魔が傷ついても見もしなかったのにその悪魔に傷がついた途端変わった。

やつは舞うようにして仲間を壊していった。

斬ったのではない。傘を一本持ちその先から火を吹き足と腕を使いあれだけ動きまわって息も乱さず。

男は疲れ切っていた。扉に身を潜め悪魔が通り過ぎるのを待った。

ガタンッ体が震え扉にあたった。

コツ・・コツ・・コツ・・ピタ

足音が止まった。

男はそつと足音の方向を見ようとした。

だがその前に頭の上から殺気がした。

見上げようとしたが首はあがらなかった。

その男の首はもう胴体にはついていなかった。

男を殺した悪魔はいつしかこう呼ばれた。

鬼の剣刃「おにのやいば」・・・鬼刃「ひめ」、と

—・—・—・—・—・—・—・—・—・—
—・—・—・—・—・—・—・—・—・—

ここは男だらけのむさくるしい場所NO，1といわれているところ

真選組屯所である。

しかしここに、容姿端麗、スタイル抜群のスーパーレディがやってきたらどうなるだろうか。

まあ、もちろん・・・

「「おはようございます！！北河隊長！！」」隊員たちが整列して部屋の前に立っていた。

「お・・・おはよう・・・」・・・こうなることだろう。

星螢は部屋を出てすぐいきなり隊員たちからのおはようコールに戸惑いながらも笑顔で返す。

そして目がハートになっている隊員たちが邪魔でご飯食べにいけないアと思うところに一番隊隊長の沖田がバズーカをぶっ放し登場というのが星螢が来てからの毎朝のスタイルだった。

「おはよう、総悟君。今日もありがとね。」

「いやあ、この位あたり前でさア。にしても毎朝毎朝あいつらもこりねえですねェ。」

「ふふ、そうだよねえ。てゆうか大変だね、隊員さんって。毎朝自分の隊長を朝起きるの待たないといけないなんて。」

「・・・いやいや義務じゃねえですから・・・」

などと話しながら食堂にいき、「あつトシくん！！おっは〜」

「ん？ああ。」土方はご飯を食べながら返事をした。

「今日もマヨネご飯？それおいしいのゝあたしも真似しようかなあ」
今日も土方の前にはご飯にマヨネーズをとぐろじょうにかけた通称・
土方スペシャルがある。

「だめですよ、星螢さん。こんなもん食ったら脳みそ腐ります。て
か土方さん。それ星螢さんの前で食べんのやめてくだせィ。真似し
てあんたみたいないたい人になったらどうするんでィ。」

「誰がいたい人じゃこらァ！！つか悪影響及ぼすんだったらてめえ
だろうがあ！！」

「ねえ、これ結構おいしいね。」

「俺の食うなあ！！」

「あゝあ。けがした責任とって死んでくだせい。」

「お前は何かにつけて俺に死んでほしいだけだろうがあ！！」

ギャーギャーやかましい三人を見て隊士たちの一人が言う。

「でもよう、こうみたら普通の女子なのにさ。あんとき怖かったよ
なあ。」

「ああ、あの攘夷浪士たちが宴会場に乗り込んだ時だろ？副長に銃
弾がかすっただけなのになあ。」

「そうそう、知ってるか、あの後北河隊長がなんて呼ばれてるか。」

それはな、といって一度きってから続けた。

「鬼を護る剣の刃のような存在でどこぞのお姫様のような可憐な容姿・・鬼の剣刃・・」

鬼刃「ヒメ」

真選組三番隊隊長・北河星螢「キタカワセイホ」は鬼刃と呼ばれるようになった。

第四話鬼の剣刃いざ参らん! (後書き)

ごめんなさい・・・土曜日とか言っというて日曜日なうえ内容
これじゃあだめですよね・・・
でも感想・評価は嬉しいです!

第5話自己紹介は簡潔に（前書き）

ガーン!! そ・そんなどうして声優ランキングに杉田さんと中井さんがはいつてないんだ~~~~!! ちょっとショックです・・
<ーー..<

エドの声優さんは好きです。

第5話自己紹介は簡潔に

屯所―

ざわざわざわ

「えーみんな静かに！」近藤は立ち上がり言った。隣には土方が座っている。

これから始まるであろう事に隊士たちは浮きだっている。
大体静まったところで続けた。

「えーみんなもう知っていると思うが、今日来る隊士はしらねえ奴
がいたら困ると思うのでな、軽く紹介することにした。」

そういい、入ってくれと戸の方を向いた。

シーン・・・

あれ？まだ入ってこない・・・え？てか心の準備できてたのに・・・

異様な空気が出てきたころ、

ドタドタドタドタ

騒がしい足音が聞こえてきた。

やっと来るみんながそう思ったとき・・・バン！！！！

あの大シャウトの後ひとまず静まり返りその美女に「わりイ。てきとーに自己紹介してくれ。」

と言い、隊士達の注目が集まる中で、

「えっと・・北河星螢、B型のおうし座、趣味は戦うk・・散歩です☆」とまあにこやかに返した。

そして現在みんなの強い要望で起き上がった近藤に宴会の許可を^奪も^{い取った}らったのだ。

「それでね北河さん・・「いやこっちの話をきいてくだ・・「いやこっちd

今、みんなで星螢を囲みしゃべっている。それを星螢はにこやかに聞いているのだ。

「すごい人気ですねイあの人、土方さんは行かなくていいんですかい？ 友達なんでしょう？」

沖田は茶化すように言った。

「かんけえねえだろ。」土方はわかっているのでそっけない。

「ちえっ！ ああいう風にアホ面下げてるとこ見れるかと思ったのに・ほんとにいいんですかい？」

「ほっとけって言ってんだろ！ つか、ちえって言うな、ちえって！」
「ちっ！」 「おまえな・・

こんなやり取りをしていると沖田の前に影ができた。「誰でィ・・・！？」

目の前に星螢がいた。じっと見ていると思えばニコツと笑った。

「な・・・なんですか・・・ってわば！？」いきなり沖田を胸にうめた。

隊士達が目を見開いたが気にせず土方のほうを見て言った。

「かゝわゝいゝ！！トシくん以外は全員むさくるしい男かと思った
らこんなかわいい子もいたんだね。名前は？年齢は？どこの子？」

目をきらきらして尋ねる星螢に胸元を指差しながら言った。

「そんなん本人に聞け。・・・あと死ぬぞ、そのままだと・・・」

へっ？といった見ると沖田は苦しそうにタップしている。

「あっごめん！大丈夫？」沖田は苦しそうに咳をしてから文句を言おうと思って顔を上げたが、銀色の瞳を見ていると豊富な胸の感触を思い出してきた。

赤くなりながら「大丈夫でさァ・・・」そう聞くと「よかった！これからよろしくね！！」と極上スマイルを見せた。

何かが目覚めた瞬間だった。

その後から沖田は星螢に近寄ってくる男を散らしたらしい・・・

！・—・—・—・—・—・—・—・—・—・—・—・—
—・—

中庭―

星螢がいた。

そこに近づく影が一つ。

「ねえ、あたしここになじめるかな？・・・トシくん。」

影―土方は言った。

「さあな、お前次第だろ・・・なじめそうか？」

「それはもちろん！！からかいがいのある人おもしろい人たちだね！！」

「・・・黒くなったな。」

星螢はそんなことないよ、と笑った。

「トシくん・・・あたしがんばるから・・・護るよ。大切なものを。」

そういつて土方に満面の笑みを見せた。

ああ、土方も少しだけ笑った。

くおまけく

しくしくしく

男が一人泣いていた。

星蛍に蹴り飛ばされたのに誰も気にしなかった人物・

「おれのこととはどーでもいいの・・・？」

近藤は一人泣き酒を飲んでいた。

第5話自己紹介は簡潔に（後書き）

近藤さん出すタイミングを見失いました・・・

第6話 団子屋って時代劇に一回は必ず出るよね(前書き)

よく考えたら銀魂って00話とかじゃなくて00訓ですよね。
替えようかな・・・

第6話 団子屋って時代劇に一回は必ず出るよね

——ここは江戸歌舞伎町、この町の某コンビニに銀髪、天パ、死んだ魚のような目に和と洋を交ぜたような服を着た一風変わった男が入ってきた。

「ハア：ったくななんだよ。こんな直射日光ガンガンの日にジャンプがどこも売り切れなんてよ。嫌がらせですかコノヤロウ・・・ってデジャブ？」

銀時はそっぴいあいつに会ったのもこんな日だったな、と思い出し出会った場所・・・雑誌コーナーに足を向けた。

「オッあった！また最後の一冊だな・・・」 いやな予感を抱きつつ銀時はジャンプを取ろうとした。

その時白い手が伸びてき、今、手に取ろうとした物がなくなった。

「な!？」 ぱっと後ろを振り返ると見覚えのある黒い服に身を包んだ美女・・・

「「あっ・・・」」 星蛍がいた。

「・・・」

「えーっと：久しぶり！」 「おお、久しぶり・・・じゃねえよ!！」 べしっ

「にぎゃ！だからごめんって言ってるじゃないのさア」

ここは前回きた団子屋である。銀時はすごい剣幕で怒鳴る。

「オラアおごるっつうからけっこうな量食ったんだよ！てかお前のほうが食ってたし！おかげで俺の財布はお前の脳味噌みたいになっからかんだよ！」

一気にまくし立ててそう言うとき星螢は頬を膨らまして言った。

「そこまで言うことないじゃないかア！それにおごってあげるって時にだけたくさん食べるのは大人としてどうかと思うよ！」

「うッ・・・」　そういわれると少し情けない気もするので黙ると、星螢はうれしそうに笑って言った。

「まあ、おごってあげるって言っておごらなかったのはあたしが悪いから・・・ハイっ！」

星螢はごそごと地面にしていた袋から小さな包みを出し銀時に手渡した。

「なんだこれ？」　訊くとふふふと変な笑みを浮かべていった。

「それはね・・・あたしの手作りクッキーなのだ！実は今日この前知り合った女の子と会う約束があるからクッキーたくさん作ってきたんだ。」

よく考えれば星螢は隊服を着ている仕事はいいのかと思ったがそうするとまた団子代を立て替えさせられるので黙って懷にしまうと少

し気になってたことを訊いた。

「で、どうなの居心地は。」　そう土方が知り合いなので何もし
てはこないだろうが彼女は男しかない処で寝泊りしているのだ。

だが当の本人は何も思っていないらしく、

「居心地？別に普通だよ？いやすごいいかな～みんな優からかいがしいしお
もしろいし総悟くんはめっちゃかわいいし・・・それに何より・・・ト
シくんずっと一緒にいられるの～～～！！」

最後のところは目がハートである。

沖田がかわいいやからかいがいのある人とかいったのはあえて訊か
ずに

「もしかしてお前・・・あいつのこと・・・好き・・・とか？」

「そうだけど？」

恐る恐る訊く銀時にあっさりとう返した。そして軽くショックを
受けている銀時を気にせず続けた。

「あたしがここに来た理由はトシくんのためだよ。この力を使って
トシくんの役に立ちたかったから・・・」

「力？」まだショックを引きずりながら聞くと星螢は少し微笑みな
がら返した。

「力というか・・・あたしは、夜兎だから。」ショックなど吹っ飛ん
だ。

「は？・・・えっとつまりこういうことだな？お前は夜兎で、そのすごい力であいつを護るためにここに来た・・・と？」

「うん！そういうこと！とはいってもハーフだから日に当たっても平気って言う御都合主義なんだけど――――」

「ええエエエエエエ！！」

「そ・・・そんなに驚かなくても・・・」

「驚くわ！マジかよ・・・じゃああいつと同類・・・」銀時は自分家に住んでる少女を思い出した。

「あいつ・・・？あ！来た来た！おいこっちこっち！カグラちゃーん！！！」

（ん・・・？カグラってまさか・・・）

「あっ！星姉ちゃん！このダメガネがもたもたするから遅くなったしまったアル。ほら謝れヨ。」

チャイナ服を来た少女は後ろにいる眼鏡をかけた少年に言う。

「神楽ちゃんが準備に手間取ったんだろ。僕のせいにしないでよ・・・ってあれ？隣の人・・・」

二人は近づいてきて星螢の隣にいる人物にきずいたようだ。

「どうしたアルか新八。星姉ちゃんの美しさに頭パンクしたアルか

「？」

神楽が覗き込むと新八は指差しながら言う。

「神楽ちゃん・あれ銀さんがいる・・」

「え？」神楽もそっちを見る

「「あ」」

「・・・・・」

「へえ、銀さんとこの従業員さんだったんだ」

星螢は心底うれしそうに言う。

「なんかすごい奇跡だね、別々のところで会うなんて・・びっくり」

「そうアルなあ。まさか銀ちゃんが星姉ちゃんの金で団子食ってるなんて驚きアル。」

神楽はそっけなくそう返す。星螢が知り合った時のことを教えたのだ。

「神楽ちゃんそんな事言ったらダメだよ？前はあたしがおごらしちゃったんだし・・ね？」

「まあ星姉ちゃんがそう言うなら今回は許してやるアルでも次やったら臓器売ってでも金返さすアルよ。」

ひどい言われようであるが逆らうと本当にやりかねないので銀時は黙っておく。

「で、お前らはどうやって知り合ったんだ？」と訊いた。

「それはね……」

もったいぶった後こう宣言した。

「次回に続く!!」

第6話 団子屋って時代劇に一回は必ず出るよね（後書き）

銀神新「えええエエエエエエエ！」

なんかいろいろすいません！！

次回は早めに投稿します。短くなるかもしれませんが・

第7話 団子屋って時代劇に必ずと言っていいほど出てくるよね(前書き)

ふーやっと言いました。

テスト一週間前なのになにやってるんだろ・・・

第7話 団子屋って時代劇に必ずといっていいほど出てくるよね

「えーっと・・・話すと長くな・・・りはしないけど話すのめんどくさいからカクカクシカジカでいい?」

「ダメに決まってるでしょうがアアアア! ただでさえこんなしよ
うもないネタひばってるですよ! きちんと説明してくださいよ!!
ねえ銀さん、神楽ちゃん。」

無茶苦茶なことを言う星螢に「銀魂の良心」駄眼鏡しんぱちがつこつむ。

「てか逆ウウ! いや逆って言うのもおかしいけどせめて読み仮名を
ダメガネにして・・・ふごオオオ!!」

新八が前に吹っ飛んだ。

「うるさいアル。話進まないし誰もお前の話なんか聞きたくないネ。」

「そうだぞ、ぱつつあん。ここはスルーしてさっさと進むトコだろ。」

「全く空気の読めないやつネ。だからお前はいつまで立っても新八
アル。作者もシンパチって打ってもちゃんとならないからシンハチ
って打ってるアルよ。」

「関係ないじゃないかアアア!」

「いやいやあるよ。だって出番減らされんじゃん。つついシンパチって打っちゃったらイラッてすんじゃん。」

「空気読んでここはジャックⅡスパ郎とかに変えるべきアル。」

「もっと出番なくなるわ!!」

銀時と神楽がこれでもかという位にいびり倒す。盛大に突っ込むベキか悩んでいると新八の隣でバキツと音がした。驚いて見てみると星螢が湯飲みを・・・いや湯飲みだったものを持ちぶるぶる震えていた。

「・・・進まないって・・・言ってるじゃなアアアい!!」

まさかの星螢の大シャウトだった。

「全くもう! ぜんぜん話が進まないじゃない!」

ぶんぶん怒る星螢を見て新八は感動していた。

(星螢さん・・・ボケ担当かと思ったらツツコミもOKなんだ・・・)

「わりい。」 「ごめんアル。」 素直に謝る二人。

「よろしい。えっと、それじゃあ話すのめんどうなんで ＊ の後をどーぞ☆」

結局それかよオオオオオ!! ツツコミは僕しかないんだな... 確信した新八^{ツツコミ担当}だった。

＊

「定春く早く来るアル！今日も一番乗りネ！」 神楽はたいてい朝一番に公園に来ている。

ちなみに、定春というのは万事屋のペットで白のめちゃくちゃ大きい犬だ。ただのドでかい犬かと思えば犬神っていう設定もあったりする。

友達が来る間ブランコにでも乗っていようと神楽は足を向けた。

しかし、いつもは無人のブランコに誰かが乗っている・・・いや乗っているというか回っている。

普通はがんばってもせいぜい180度位なものだろう、だがそのブランコは、360度回転しているのである。

夜兎族の神楽でもこんな360度高速回転ブランコ：高速回転ブランコいや、高回ブランコ見たことがない。

呆然としていると速転ブランコに乗っている人物が神楽にきずいたらしい声をかけてきた。

「だれエエエかいイイイるのオオオ！たすウウウけてエエエ！！」
「どうやら若い女らしい。」

叫び声で我に返り定春を呼ぶ。

「わかったヨ！1，2，3で手を離すアル！定春がうけとめるネ！」

「フアアアイイイ！！」 せーので数える。「いちーにイー
「てエエエイイイ！！」・・・えええ！」

女性は2で離してしまっただようすごいスピードで飛んでいく。
定春を走らせて入るが間に合うかどうか分からない。神楽もダッシュで堕ちたであろう付近に走る。

すると前から定春が黒い影を乗せて走ってきた。

「よかった！間に合ったアルな！」 大丈夫かと駆け寄るとその人物はがばつと神楽を胸に抱き言った。

「ありがとう！！ちよつとこぎ過ぎて止まなくなちゃって…たすかったア。えつと…名前は何？」

神楽はどうか胸から抜けて言った。

「この位お安い御用ネ！無事でよかったアル。私は神楽、おねえちゃんは何？」

「あたしは北河星螢。ありがと神楽ちゃん。」

「それでその後二人は・・・「ちよつとストップ！ちよつと待て！」

ここまで話した時銀時がストップをかけた。

「なにアルか？その後いろいろ話して仲良くなったた・・・で終わりアル。ちよつと待つヨロシ。」

「わかった、わかった。もうそれでわかったよ、で、一つお前に聞

きたいんだけど・・・」
と、星螢を見て言う。

「なにー？」 少し眉をひそめる星螢。

「さっき少しこぎ過ぎて気がついたらえーっと高回ブランコ？ になったつってたが・・・」

「ああ、なんだそんなこと？ そうなんだよね。いつの間にやら回ってて。」

銀時は呆れたような顔をした後言った。

「お前って正真正銘のアホだな。まあそんな気はしてたけどほんと馬鹿————」ゴギッ

馬鹿といわれるのは腹立つ、と銀時の指を曲がらないほうに曲げてから何もなかったように言った。

「にしてもあの時は驚いたな。夜兎って見た目は人間っぽいからいわれるまで気がつかなかった。」

「わたしもアル。でも星姉ちゃんはハーフだから日に当たれるアルな。」

うらやましそうに言う神楽に苦笑しながら言う。

「そうだけどあたしは地球産の夜兎だしハーフだし。生命力とかは純血の夜兎のほうがずっとあるよ。」

「でもどうやって星螢さんって生まれたんですか？」 ずっと黙ってた新八が口を開いた。

「う・・生まれ方・・？」 何を考えたのか星螢がうろたえる。

「い・・いやそう言う意味じゃないですよ！ただ星螢さんが生まれたのはまだそんなに天人あまんと来てないんじゃない？」

ぱっと身は十代にも見える容姿なので年齢層がよくわからない。そう言うとうれしそうに笑っていった。

「いやいや、うれしいけど夜兎なんか今でもあんまり来てないよ。それに齡は銀さんとあんま変わんないしね。

お母さんがどっかの戦士で地球に不時着？したんだって、そいで地球のお父さんの間にあたしが生まれたの。」

懐かしそうに言う星螢に新八がその後どうなったのか尋ねる。

「4歳のとき二人共死んじやった。周りの反対押し切って生んだものだからだれも助けてくれなかったけど。」

「あっすいません。こんなこと・・」 新八があわてて謝る。

「ううん。訊いてくれていいの。だって幸せなことは訊いてほしいものでしょ？」

「幸せなことか？」 銀時がつぶやく

「うん！だってここからトシくんと暮らし始めたんだもん！誰も助けてくれなかったのに、ド貧乏なトシくんが、好きな人に拾われることは幸せでしょ？だからあたし護るって決めたの。バカだけどこの血を使って。」

そこまで言うと思い出したようにあわてる。

「ああっ!! もうトシくんが見回りから屯所に戻ってる時間じゃないか! あたし帰るね、あっお金は置いてくから楽しかった〜じゃあね!!」

一気に言うど返事も聞かずにダアツと帰って行ってしまった。

「ハハ、言っちゃいましたね。銀さん」

「ったく。まあ団子代置いてただけましか。」

「銀ちゃん、私今度おごしたら許さない言ったアル。」

「ところで、ジャンプ買いにいかねえとな〜」

「あっ待つアル!!」

「待ってくださいよ! 銀さん、神楽ちゃん!」 3人は走っていった。

それを見ていた影が二つ。

「「出番がぜんぜんないなァ」」

第7話 団子屋って時代劇に必ずといっていいほど出てくるよね（後書き）

最後の二人は近藤さんと山崎です。
次回は屯所の予定ですから・・・

第八話 一度でいいからケーキバイキングに行ってみたい（前書き）

更新遅れましたアアア!!

先週テストでして・・パソ禁止されてました。

こんなとき携帯があればこっそりできるのに・・・
すいません<><>

第八話 一度でいいからケーバイキングに行ってみよう

カタカタトントン　まだ少し薄暗い早朝、屯所の台所で一人の女が動き回っていた。

動くたびに耳の横に残したこげ茶の髪が揺れる。

瑠璃色のスリットの入ったチャイナ服に、山吹色の生地茶色の紐を腰に結んだシンプルなエプロン。

その姿で鼻歌を歌いながら台所に立つ姿にはまるで新婚のお嫁さんのような雰囲気がある。

彼女はじつに手際よくまんじゅうの生地にあんこや、クリームなどをつめていく。

ほかにも作っているらしくオーブンから甘いにおいがもれ屯所中に広がる。

この男ばかりの屯所でこんなことは今まで一度もない。
どうしてこんな事になっているかという話は昨夜に遡る。

[illegible]

「北河隊長、これどうぞ！京の土産です。」

そういつて九番隊隊士の一人小野寺が、最近入隊した三番隊の女隊長、北河星螢に京まんとロゴの入った箱を手渡した。

星螢は子供のようにうれしそうに言う。

「わア！うれしい、ありがとう！えっと・・・小野寺くん。」
オヤジ

「・・・小野寺です」
オノデラ 星螢はわかってるよと、軽く返す。

「そういや九番隊は一週間出張に行くってこの前言ってたね。・・・
オヤジ君。」

「・・・もうそれでいいす・・・」

すでにまんじゅうを食べ始めている星螢にオヤジいや小野寺が言う。

「そうそう副長にも報告書渡すついでに同じの渡したんですけどね、
マヨネーズと合わないって・・・まあ普通はまんじゅうとマヨはあ
わないんすけど・・・」

副長の土方は極度のマヨラーでなんにでもたっぷりかける。見てる
ものがすっぱくなってくるほどである。

「そういったら副長、北河隊長のなら合うって言ってましたよ。菓
子だけは絶品だって。」

そこまで言った時後ろからドタドタとたくさん足の音が聞こえてき
た。

「あっ！てめえ小野寺！なに勝手に北河隊長に土産渡してんだ！沖
田隊長！こいつ第十二条勝手に土産を渡すことなかれに背きました、
粛清を！！」

ギヤアアアアア！！
いつの間に来たのか親衛隊に粛清される

かわいそうな小野寺。^{オヤジ}

小野寺の断末魔の叫びを聞き流し、星螢は瞳をキラキラと輝かせていた。

！・一・一・一・一・一・一・一・一・一・一

で、現在に至るわけである。

そうした経緯がありチャイナ服の女もとい星螢は朝早くからお菓子作りに励んでいるのである。

屯所中に甘い匂いが漂い始めてから少しして台所に一人の青年が入ってきた。

「おはようございます。星螢さん。」

声をかけてきた青年にぱっと笑顔を向ける。

「おはよ！総悟くん！今日はずいぶんと早いね。あつトシくん起こそうと思って早く起きたの？」

一番隊隊長の沖田総悟は、星螢の世界一大切な男土方を暗殺しようとする男である。

が、その場面を見たにも拘らず「仲がいいね。」と笑って言い全く事実にきずかない。

早く起きるときは大抵そうゆうときなのだが全くきずかない。

「そう思っただんですがね。なんだか甘い匂いが・・・なに作ってる

んですかイ？」

「あっそれがね！聞いて聞いて！昨日ね————」

瞳を輝かせながら矢継ぎ早に話す星螢の話はわかりにくかったのだが、何とか理解しなるほど、といった。

「それでいっぱい作ってんですねイ。でもあいつ一人には食いきれませんぜ。」

その多さといったらケーキバイキングできそうな量である。

「大丈夫！あたしも食べたいからいっぱい作っただよ。」

確かにこの前どのくらい食べれるのかと宴会で『10分間わんこカレー大会』を実地したところ大なべを空にしていた。

（しかしそうなる俺が食えないじゃねえか・・・何とかならねえもんだろうか・・・）

星螢は思案顔の沖田を不思議そうに見ていたが思いついたように笑っていた。

「でもこんなにたくさん二人で食べたりすると太っちゃうから・・・総悟くんも食べてね？みんなにも分けようか。」売ろうと言ってからあっ焼けた、とつぶやいてオーブンを覗きにいった。

「やっぱあいつには勿体ねえなあ。」　ぼそりといった。

「今日の朝飯は北河隊長の手作り菓子だァァァァ！」と誰が言ったかそんなこと食堂には朝からお菓子がたくさん置いてあった。しかし隊士全員がおなかいっぱいになる量ではない。前方で争うように食べている中、

後ろの方の席に土方と星螢がいた。

「どおどお？おいしい？」星螢が訊いた。

「まあまあだな。」土方はそっけなく言う。

「マヨと合ってる？」

「まあまあだな。」

「何でまあまあとしか言わないの！！」身を乗り出して言う。

「まあまあだな。」

「答えになってない！」

するとやっと土方は星螢のほうを向き軽く怒りながら言った。

「だから昨日俺がいったこと知ってんだろうが！わかりきってること訊くんじゃねえよ！」

昨日小野寺オヤジが言っていたこと『菓子だけは絶品だって・・・』

思い出すと満面の笑みを浮かべていった。

「作ってよかった!!」

本当に素直じゃないんだから・・・おいしい

ならいいけどね

第八話 一度でいいからケーキバイキングに行ってみたい（後書き）

あ・・・近藤さん出せなかった

第九話 美女と野獣は結構多い（前書き）

初めての2日連続投稿ですね＜^0^＞

というのも次の次の話（11話）から長編書いてみようかと思って
いまして・・・

詳しい事は10話でお伝えいたします＜＜＜＜＜＞＞＞＞＞

第九話 美女と野獣は結構多い

「近藤勲こんどういさおまだ一度しか出ていない真選組の局長である。

部下からの信頼も厚く、頼れる人物である。

だがしかし、誰にでも欠点というものがある。そう完璧な人間などいないのだ。

「もう、まったく！局長がサボったりするから今日は歌舞伎町の見回りだったのにいけなくなっちゃたじゃないか。」

ある日光のきつい昼間に灰色の傘を差した黒い隊長服姿の星螢がブツブツいいながら歩いていた。

なぜ機嫌が悪いかというと近藤のいつものあれのせいで土方に走らされているのである。

「だいたい居場所がわかってるなら、電話とかすればいいじゃないか。連れて帰って来いって・・・」

事情を知らない彼女が着いたのは恒道館道場と書かれた広い屋敷の前

(ここ・・・?)

「すみませーん！局ちょ・・・近藤さんいますかあー。」返事はない。

「すみませーん！！」さっきより大きな声で言ったがやはり返事は

ない。

（あれ／＼ここだっていったのになあ）さて、どうしようかと考えていると、

「あのゝ家に何か御用ですか？」後ろから声がしたので振り向くとそこには不審そうにした女の人が立っていた。

「あつごめんなさい。ちよつとここに人を探しに来てるんだけど・・」

「人を探しですか？でも今家にいるのは私だけですし・・あなたみたいなきれいな女性がゴリラを探すとも思えないですしねえ。」

「そんなきれいなんで・・・ゴリラ？」聞き流しそうになったが今この人ゴリラっていったような・・・疑問を感じていると、

「ええ、ゴリラがここにいますよ。ほらこれです。」ズリツ彼女が後ろから出てきたのは、殴られすぎてだれだかわからないくらいにボロボロの・・・近藤だった。

「
・
・
・
ええ ええ ええ ええ ええ
!!!」

桜色の着物を着たきれいな女の人はめちやくちや驚いてる星螢に中
に入って話しますよと、とりあえず屋敷に招き入れてくれた。とり
あえず自己紹介ということになり星螢が真選組だというと彼女はす
ごく驚いた。

「ええ！ホンとですか！？こんなに可愛い女の子が・・」

「かわいいなんてそんな照れるじゃないかア。」うれしそうに言う。

「けどもう女の子じゃないよ？あなた位までだよ？そう表現するのは。」

「えっ、私と同じくらいでしょ？」 「いやいやまさかもう二十代半ばだよ。」 しばしの沈黙

「にしてもスタイルいいですね・・・どうしたらそうなるんでしょうかねえ？」

溜息交じりに訴える彼女に微笑みながら言う。

「ありがと。でも大丈夫！！たくさん食べて飲んですれば○姉妹も夢じゃないって！！」

ねっ、とスマイルを見せる星螢に「ありえないけど星螢さんに言われるとうれしいです。」と苦笑する。

「あっ、ところで名前は？年齢は？」

あらい言い忘れてたと、少しあわてて自己紹介してくれた。

名は志村^{しむらたえ}妙といい、父の残した道場復興のために十八歳ながらキャバクラで働いているという。

「すごいなア。いやほんとえらいねえ。まだ胸も成長していない内

から・・・」

「成長してないんじゃないかって成長しなかっただけです。」

「そんな健気な妙ちゃんにお土産の破亜限墮津をあげよう！」

「わア！ありがとうございます。私好きなんです。」

「たくさんあるからあたしに遠慮せずにどんどん食べてね！」とい
いながら目はアイスしか見ていない。

「ふふふ、一緒に食べましょうよ。せっかくだたくさん買ってきてく
ださったんですし。」

「わーい！ありがとうございます」ガバツ

「もう星蛍さんたら子供みたいですよ。」妙は笑いながら言う。

もうどっちが年上かわからない。とゆうか星蛍が年上には全く見え
ない。

楽しそうに話す二人の頭に近藤のことは飛んでいた。そこに忍び寄
る影・・・

影ー近藤は星蛍の肩に手を置き後ろから「俺のこと、忘れてるだろ
オオオオオ！！」と言った。

「あ・・・ごめん・・・」

「てかお妙さんひどくないっすか！？俺がアイス渡しても『一緒に食べましょう』なんていつてくれないのに！ひどいひどいひどいひどい・・びごオオオオオ！！」

ひどいをひどく連呼する近藤に妙がアッパーカットを喰らわす。

「お前と星蛍との優遇のさは当たり前えだろうがア！！迎えに来てくださっただぞ！！」

「ああ、そうそう、。それでなんで局長ゴリラさんはここに・・・」
まだ殴られている近藤に聞く。

「それはこのお妙さんを護りにきてだな・・・」

「違うだろうがア！！お前が勝手にストーキングしてるだけじゃねえかアアアア！！」

星蛍の顔が固まった。————えっ・・・まさかね？局長がまさかね？まさか・・・

「もしかして局長ゴリラ・・・ストーカー・・？」

「いや、だから俺はいつもお妙さんを近くで護ってるんだって。後ゴリラって呼ばないで何気に」

「それを・・ストーカーと言うんじゃアアアア！！」ドゴオオン！！

妙はさらにヒートアップする。

「いやいや待って、ってあれ？いつもよりきつくはない？あっ星蛍助けて〜！！」

「局長さん。^{ストーリー}あたしね別に誰が犯罪してようが別にどうだっていいの。」

でもね、と続ける。手には傘をつしかりもって。

「あたしが一番許せないのは……」少し遠くから助走をつけてこっちに走ってくる。

「友達とトシくんを困らせることだアアア!!」 ドガアアアアア
ン!!

とび蹴りをお見舞いした後二人の制裁は土方が電話をかけるまで続いたという……

第九話 美女と野獣は結構多い（後書き）

この話は結構前からパソコンに書いてあったんですよ。
打つのめっちゃ遅いので話できてもなかなかです。

だから2日連続なんてなかなかできないんですよね< ^ 0 ^ >

第十話 話すときは蕎麦は飲み込んでからにしろ（前書き）

遅くなってほんとすみません！！

えっお前なんか誰も待ってないって？なんて言わないで！

長編のお知らせは後書きで！！

第十話 話すときは蕎麦は飲み込んでからにしろ

ダッダッダ 「うるせえな。」土方は自分の部屋で書類整理をしながらつぶやいた。

副局長という役職なのだが毎日ストーキングにいそしむ上司のおかげで仕事はかなりの量だ。

特に今月は女隊士という異例の入隊もありいつもより多い。余計にイライラする。

バン！ 溜息をつきかけた時、襖が開いた。

「副長！ たった今やつの目撃情報が入りました！」

「本当か！ どこでだ？」 溜息もぶっ飛んだ。

「えっと何でも芭寡陀商店街バカダってトコの八百屋の前で見かけたそうです。」

芭寡陀商店街というのはここからはそう遠くないが大きいことで有名だ。

「その付近にいる奴はとりあえず全員向かわせろ。怪しい奴がいたらすぐしよっ引け。俺も・・・」

いくと、言いかけて気付いた。自分の周りに散乱している書類の量、明日までに仕上げなければならない

のだが、今行くと間に合いそうにもない。

チッと、舌打ちし部下に言った。

「俺は今出れそうにねえ。つってもお前らだけじゃ見つけた時あれ

『今どこにいった？』 「えーっと・・・ヤマノシンです。」 『は？何だそれ。』

「ふふふ・・・なんとねあたしはあそこにいるんだよ！」

『あそこ？』 重要な場所なのかと、息を呑み続きを聞くと・・・

「なんと今あのそば処 山の神に・・・」 『蕎麦屋かよー!!』

「蕎麦屋じゃないよ！おいしいそば処だよ。」

『んな情報いらねえよ！その周辺に桂がいんだよ！あとそば処じゃなくてそば処だろ！』

「へえーそーなんだー。（おいしい話しかと思ったのに）」

『興味をなくすな、とにかくちやっちゃと食って搜索しろ。白い変な奴が近くにいます写真メールで送るわかったな？』

「うん。わかったー。あっおかわりくださいーい！」 『頼むなアアアー!!』 ピッツーツーツー

「よし！じゃあすぐ（食べて）探しに行こうっと。」 うんうんと頷きながらつぶやいた時・・・

「あの、すみませんお蕎麦きれてしまって・・・」 沈黙・・・

・・・ガーン（これは何？やっとな小説かけたのに保存するの忘れたア並にシヨック・・・）

ズーン この世の終わりのような顔をしてうなだれているとスツと隣から蕎麦の器が差し出された。

「え？これ・・・」
驚いて隣の席を見ると長髪の男が言った。

「食ってくれ、携帯に早く出ろと急かしたのは俺だ。」
「でも――」

「星蛍は困ったような顔をしている。」

「本当にいいんだ。この蕎麦ずいぶん気に入ってるみたいだしな。それじゃ俺はこれで・・・」

長髪の男は少し微笑みながら言った。

「待って！」

「ほんとに……」

男は眉をひそめた。

「だって……この蕎麦……何も入ってないよ？」

長髪の男が差し出した器は空で二人の隣で連れ（白い生き物）の蕎麦をすすする音が響いていた。

—	
•	•
—	—
•	•
	—
	•
	—
	•
	—
	•
	—
	•
	—
	•
	—
	•
	—
	•
	—
	•
	—
	•
	•

「いやすまん。あんな事を言っておいて・・・」

吹き荒れる風に

「いいいえ、こっちこそ店変えてまで蕎麦いただくなんて」ズズーもごもご「うれひいです。」

星螢たちは今荒地にある一軒の立ち食いそば屋に来ているのである。

強風の中だが。

「一度言ったことだ。侍に二言はない！しかし同じではないからな、すまない。エリザベスお前も謝れ。」

エリザベスと呼ばれた白い生物は『ごめんね』と書かれたプラカードを出した。

「ふふっかわいいですねーエリザベスちゃんって。」どの辺を見たのかそう言った。

「そうだろう！かわいいだろう！みな照れて本当のことを言わないのでな、そう言われたのは初めてだ。」

「ええっ！？照れ屋さんが多いですねえ。」星蛍はしみじみといった。

「うむ、そうなんだ。しかしこいつはかわいいだけではないのだぞ。裏の顔もあるのだ。」

こんなやり取りのあと二人は気が合うらしく長話をしていた。もちろん星蛍の頭から桂を探すということはとっくの昔に消えている。

しばらくバカ話をした後エリザベスが『桂さんそろそろ会合の時間ですが・・・』と書いたプラカードを出した。

「もうこんな時間か。すまないが用があるのでなそろそろお開きとしないか。」

「そっかあ。残念でもたのしかったよ！じゃあ最後に一つだけ。」

そう言うのと携帯を取り出しいくつか操作した後メールを見せた。

「ん？これは・・・」男Ⅱ桂の顔が引きつった。それは桂の指名手配書だった。

「ど・・・どうしてこんなものを・・・」 「実はね、あたし真選組なんだ」。さらに引きつる。

「で、非番なのにもかかわらずトシくんはこの人探せて言われて・・・えーっと・・・けい？「けいじゃない桂だ！！」・・・桂^{カツラ}さん？」
つい言ってしまった

「かつらって言うんだね・・・最近の名前は読めないね。まっ、とにかく本人なんだよね、ヅラ君。」

「ヅラじゃない桂だ！・・・あれ？」 何でもないことのように言い二人に大人びた笑顔を見せる。

「ちっちっち！このあたしにわからないことなど無いのだよ。あなたがこの桂小太郎さんなんでしょ？」

桂と訊いてわかったのにも拘らず上から目線で訊く星螢にばれたのなら仕方ないとあきらめ首を縦に振った。

「そっかそっか。素直でよろしい！だから会合行っていよいよ。」
あっさり言った。

「は？そ・・・それはどういうことだ？俺を捕まえるのが仕事じゃないのか？」

「そうだね仕事の日だったらそうしないといけないね。でもねあたしは今日休みなんだよ。休みの日にできた友達を捕まえたりしたくないもん！」 仕事と休日をごっちゃにしないの！と胸を張る星螢に桂も苦笑する。

「そうか、ふっそうだな。では俺もお前を斬るわけにはいかぬな。」

「でも仕事のとき会ったら容赦しないよ。」ニツコリ笑う星螢に桂も言う。

「ああ、そのときは勝負だな。鬼刃^{ヒメ}こと三番隊隊長北河星螢殿。」
星螢は少し驚いた顔をしてから

「そうだね、狂乱の貴公子こと桂小太郎さん。」と言った。

桂は一言残しエリザベスと共に去っていった。

桂は

「火の鳥に気をつけろ。」

星螢にそう告げた。

第十話 話すときは蕎麦は飲み込んでからにしろ（後書き）

そのころ土方は・「遅い・・・」 イライラしていた。

えーっと・・・どうでしょ？

感想・意見お待ちしております。

って終わらせたらいけないのだった・・・

でもお知らせと言ったら次から長編やります！で終わりますしね・・・

えーっと・・・今回は万事屋出ません！でも読んでください！！

がんばりますくく0くく

第11話 人の話はちゃんと聞きましょう（前書き）

（1日遅れの）メリークリスマス！！

2話前から言ってた念願の長編です！

でも次の話の続け方よくわかりません＜＞0＜＞

次話投稿するのに時間がかかるかもしれません・・・

第11話 人の話はちゃんと聞きましょう

山奥に佇む二つの倉庫、一つには黒光りする刀や銃が散乱している。もう1つにはダンボールが山積みされている。

高くそびえるダンボールに囲まれるようにして3人の男女が立っていた。

それらを見ていた一人の男が自身の短い茶髪をかきボソツとつぶやいた。

「なんや、こんだけか。こんなちよつとやったらすぐ売り切れんで」

不満顔でそう言うのと隣に立っていた女が冷ややかな目で言った。

「仕方が無いですわ、穂積さん。」 ホヅミと呼ばれた男が女のほうを見る。

「どこぞの大馬鹿が注文するのを忘れて遊びほうけてしまったんですもの。」

「どこぞの大馬鹿で俺のことゆうとんのか。」

「ほかに誰がいました?」

「あのなら、俺は・・・」

「言い訳など聞き飽きました。・・・それより剣様^{くろう}、いかがでしょうか？」

後半はもう一人の男に向けられた言葉だ。さっきと違い顔に笑みを浮かべている。

「問題なく事は進んでいる。さすがだ、麗子。」 剣と呼ばれた男はそう言ってレイコの髪についている紅バラの髪飾りをそっと直した。

「あ・・・ああありがとうございます・・・」 彼女の頬が髪飾りのように赤くなった。

剣はクククツと、笑って不満顔の穂積に向かって言った。

「足りなくなったらドンドン注文しろ。きらすな。」 穂積はわかった、というように頷いた。

そして 「もどんで。」 と、まだ頬を赤に染めもだえている麗子に声をかけた。

途端にスツと冷ややかな目に戻り、「わかっていますわ。キャバ積さん。」

「穂積や！まだ言うてんのか！遊んでたわけちゃう言うてるやろ！
」

そんなことを言い合っていると剣が翡翠の箱を愛おしそうに撫で語り始めた。この男は時々こうする。二人は動きを止めた。

「これは始まりだ。俺の野望はこんなことじゃねえ。これを・・・
こいつを—————」

最後の所はよく聞こえなかった。だが二人はひざまずいた。麗子は妖艶に微笑みながら言った。

「わかっていますわ。剣様。すべてはあなたのために・・・」 外
ではもう夜が明け始めていた。

！・—・—・—・—・—・—・—・—・—・—
—・—・—・—・—・—・—・—・—・—

じゅるじゅるカッカカッごつくん・・・「うくん・・・やっぱおいしい
いっ」銀色の瞳を細めて星螢は言った。

屯所の食堂その大体真ん中の席に陣とって、朝から大きな鉢に山盛りのマヨ卵マヨタマがけご飯を食べている。彼女の細い体のどこに入るのかと隊士達は日々疑問に感じている。

近くで食べたいと思ってる者も少くない。ただし実行したものは地獄を見たりする。

そこに「わ・・今日も食べてるんですね、それ。」と、声とともにあいつが声をかけた。

奴とはもちろん・・・「あ、おはよう・・やま・・やま・・やま・・山崎くん！」だ。

「おはようございます。山崎です。読めないからってジミー言わんでください。」苦笑しながら右隣の席に座った。山崎は朝食Aセツトを食べようとして思い出した様に言った。

「そういえば星螢さん。今朝の話し覚えてますか？」

「今朝の話？」

「ほら副長が言ってたじゃないですか。最近巷で騒がれてる――――」

「えっもしかしてあれ！？昨日トシくんが低い声で『俺のものになれよ。悪いようにはしねーぜ』
なゝんて言いながら迫ってきて・・」

「せ・・迫ってきて？」全く関係が無い話であるがそれでも男、こういう話には興味がある。

「手を背中にまわしてきて・・・その後・・イデッ」後ろから星螢の頭が叩かれた。見れば・・・

「まったく仕事の話してるかと思えば一体何の話してんだよ！」鬼の形相で二人を睨んできたのは、土方だった。

「あ！おはようトシくん！！」殴られたのにも拘らず満面の笑顔で言う。

「おはようございます、副長。それでその後どうしたんですか？」

「はあ？」話の続きを聞こうと思って土方に聞くとさらに睨まれた。

「んなもん・・夢落ちだよ。」星螢がニコニコ笑いながら言った。

ガクッ「ってじゃなくて！俺が言おうとしたのは火の鳥のことですよ！今朝の会議の！」

「火の鳥？なんかどっかで訊いたような・・・」

「麻葉組織だろ。攘夷浪士とつながりがある。」

いつのまにか星螢の左隣に座っていた土方が言った。

「あゝ・知らないや。」寝てたからと、言って山崎の朝食についていた小鉢を食べ始める。

俺のきんぴらが・と少しうなだれた山崎を一瞥して土方は話を続ける。

「火の鳥ってのはさっき言ったとおり浪士共と繋がりのあるってうわさのある麻葉組織だ。」

そこまで言って山崎の朝食についていたもう一つの小鉢を取る。

「で、なぜそんなうわさがあるかっていうと奴らはまさしく不死鳥のような組織なんだよ。」

「不死鳥ってのは死なない鳥のことですよ。」山崎が横から言う。

「奴らは何度組織をつぶしてもまた裏社会に戻ってきやがる。最初はそんなうわさ無かったんだがな。」

「ここまでくるとって事で調査があって発覚したんです。」

「ほお」わかってるのかわかってないのかふんふんとうなずく。

「で、調べたところどうやらこの頭が有力攘夷浪士・火鷹勤ヒダカツトムの弟だったんです。」

「ふんそこまでわかってるなら、ちゃっちゃとその兄弟殺せばいいんじゃないの？」
散歩に行こうとでも言うように物騒なことを言う星螢に若干顔が引きつる。

「出来たらとつくにやってるだろ。あいつらは商売こそ下手だが剣の腕はいい。」

「いつも逃げられてる幹部のことですね。頭の火鷹剣。」

速ホジミシンジの使い手、穂積信司。そして紅バラの銃使いと恐れられる貴崎キサキ神
麗子レイコ。」

「へえ」

「覚えれました？」

「うん！火の鳥って言う麻薬組織で、商売が下手で、逃げ足だけは速い・・・弱いんの？」

ガクッ「なぜ、そうなる・・・」2度めの説明を終えた二人はこけた。

「星螢さん、ですから・・・」山崎。「もう一度説明しなおそうと山崎が口を開きかけたその時、名前が呼ばれた。振り返ると無表情の沖田が立っている。

「お・・・おはようございます・・・」口元を引きつらせて挨拶すると沖田は笑って言った。

「稽古^{しめて}つけてやるからちよつと来い。」

「い・今朝ごはん食べてるんでちよつと・・・」何とか回避しようと言ってみるが、

「なんもねえじゃねえか。」見れば山崎の朝食は誰かの手によってすべて食べられている。

そこに山崎の逃げ道をなくした本人が沖田に言った。

「おはよう、総悟くん！精が……入るね！」

「精が出るだろ。」土方の冷静なツツコミ。

「おはようございやす、星螢さん。ちょっとこいつにも精入れてきます。」

そう言って食堂を去っていった。

土方も「様子見てくる」と言い食堂を出て行った。

一人残された星螢は笑みを浮かべつぶやいた。

「楽しくなりそうだな……」

！・おまけ・－

土方が連行された山崎の様子を見に行こうと食堂を出ると、ギャアアアアアア！！どこかで断末魔の叫びが聞こえたという……

第11話 人の話はちゃんと聞きましょう（後書き）

うーん・・・なんだかプロローグって感じですね・・・

ぐだぐだ長くてすみません<ー0ー>

第十二話 質問は手を挙げるまえに考えろ（前書き）

久々ですね！謝ってばかりですみませんが、本当に申し訳ございません！！

こんな知らせばかりなのですが、私もう受験勉強しろといわれ始めてしましまして・・・と言っても来年受験生なのでもう少しいけると思います・・・

さらに不定期になるかも知れませぬ・・・できる限りがんばりますので見捨てないで下さい！＜＞0＜＞

第十二話 質問は手を挙げるまえに考えろ

奇襲をかける、朝の会議で土方がそう切り出し、説明し始めた。

今回は星蚩も寝ていなかったもので、少し安心した。時々話聞いてたのかと突っこみたくなる質問をしてくるが寝られるよりまだいい。それで理解しているかは別だが・・・

前回、つまり星蚩が始めて襲撃した時は彼女自身が全く聞いていなかったので大変だった。主に土方が。

襲撃する相手というのは、最近巷でうわさになっている例の火の鳥だ。

他が捕まえられなかった頭でも捕まえれば真選組の株も上がるだろう。そう考えると自然と士気も上がる。大体の隊士達は緊張し、顔を強張らせ指示を聞いている。

そこに何度目かの、のほんとした声が聞こえてきた。

「はーい！一個質問いいですか？」　　そういつて挙手したのは星蚩である。

「あー・・・なんだ？」　　いい加減面倒くさそうに土方は返事をした。

「えっとね〜・・・えっと・・・」 そんなことは気にせずに質問を考える。

考えてから言えよ！てか質問は考えるもんじゃねえ！とか突っ込みたいことはいくつもある。
が、言っても意味が無いことは確かなので仕方なく待つ。

「えっと〜もう質問することが無いんだけどどうしたらいいですか〜？」
ニコニコと笑いながら言った。

「質問を質問すんなアアアア！！嫌がらせかコラア！」

「何ですかイ。土方コノヤロー、疑問点があったら質問しろって言ったくせに矛盾してますぜ。」
沖田が茶々を入れて来た。

「そうだ、そうだ。」

「これは疑問じゃなえだろうが！質問じゃねえだろうがっ！」 沖田にまで言われて余計に顔が引きつる。

「まあ、そんなことは別にいいじゃないですか。」

ね、と言つて沖田に抱きつく。沖田が赤くなつてやめてくだせいと離れようとする。

ギョウウ腕に力を込め離れないようにしてから小さな声でつぶやいた。

「それに、その強いって言われている人達と戦えるんだよね・・・」

さっきまでの砕けた笑顔から一変し、ニヤリと口角を持ち上げる。

土方はどうにも彼女のこんな顔が慣れなかった。自分に向けられてる訳ではないのに妙に落ち着かない。

知らず知らずのうちに顔を凝視していたらしい、星螢がこっちに顔を向けた。

普段の屈託の無い笑顔で、がんばろねつと、言った。
こりや気づかれてたなと思ひながら、おうと短く返した。

明日の事になんとも嫌な予感がし、ふうつと紫煙を吐き出した。

$\vdots$

「御用改めである！真選組だアアア！」

近藤の掛け声で隊士達が大勢なだれ込んだ。

會議の翌日、港の近くにある倉庫の周りに隊士達が配置された。星
螢の役割は裏口から逃げようとする浪士や火の鳥を追いつめ、捕ま
えることである。

後の隊士は、2、5番隊は、星螢と同じく裏から、近藤、土方を含む後の隊員は正面からだ。

男ばかりの真選組に女が一人、おまけに前回の襲撃ので一躍有名になったのでかなり目立つ。

そんな状況を知ってか知らずか、心の底から楽しそうに愛用の傘かまえている。

こんな場面でニコニコ笑っている星螢を不気味に思いながらも一人の浪士が刀を振り上げた。いや振りさげようとした。

パーン！その瞬間ブレの無い動きで男を撃ち抜いた。

「早く幹部クラスとやりたいな。まあウォ・ウォー……準備運動だよね！」

一人でうんうんと、納得していると刀を構えた男達が星螢をぐるりと囲んだ。

「三番隊隊長北河星螢！！攘夷に刃向かう幕府の犬よ！天誅を下さん！！」

いけエエエエ！と言い放ち、星螢に数十人の男が一斉に刃をふるった。

「全く一人にこんなにたくさん情けないな。その分トシくん達が相手する分が減っていいけど……」

そう言って土方達がやり合っている所をちらりと見た。大丈夫そうなのを確認し、ホッと息を吐いた。

「あっちは加勢とか必要なさぞだし……いいよ、何人でも相手にして……あ————」

まずは前に出て傘で目の前の浪士達を傘で数十メートル吹っ飛ばした。

「げ————」

次は傘の先から火を吹かす。乱射しているように見えるがすべて急所に当たっている。

そして足蹴りで残った男たちの大半を吹っ飛ばした。

「る！」

銃の弾と足蹴りを避けた若い男の顔はひどく青ざめ、ガタガタ振るえていた。

星螢が白い頬に真っ赤な血を着けニッコリ笑いながら振り向くとひいっと、情けない声を出した。

そして刀をがちやがちや鳴らしながら口から搾り出す様に言った。

「あ・・・ああああ・・・おおおお・・・鬼イイイイ！！！」

若い男はそう叫び星螢に突進してきた。それを右に避けそのまま腕で胴を突き抜いた。

そして若い男の耳元にささやくように言った。

「鬼だよ？そのとおり。だってあたしは今、鬼の劔刃^{ヤイバ}って言われてるもん。鬼ってあたしの大好きな人のことなの。だから前の名より気に入ってるんだ。」

もう息をしていないだろう男につぶやきドスツと男を落とした。

「ふいゝ終わった終わった。ってこの後どうしたらいいんだろ？加勢・・・はしなくて良さそうだしなア」

見回してみると、あちこちで煙が上がり皆同様に劔を合わせているが、何とかやってそうだ。

とは、言っても気になっているのは土方と沖田、ぎりぎり近藤位なのだが・・・

三人がそう簡単にやられる訳も無い。つまり加勢する必要がある所は無い、となる。

集団攻撃に慣れないので向かってきた奴を倒した後どうしたら良いのか分からない。

トシくんなんて言ってたっけ、皆殺しはダメなんだよね、と回らない頭をフル回転していると・・・

「あら、もう全員やってくれちゃったのねエ。さすが、恐ろしいわ。」

凜とした涼しい声が聞こえてきた。

後ろを振り返ると女が一人地面に転がっている死体を足で突いていた。

女は星螢が振り返ったのにきずくと前を向き笑いながら言った。

「お初にお目にかかりますわ。鬼刃殿。お手並み拝見させていただきました。見事な腕前ね。」

女は切れ長の目を、細め妖艶に微笑んだ。

第十二話 質問は手を挙げるまえに考えろ（後書き）

感想・苦情などお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9933x/>

銀魂～鬼刃の日常～

2012年1月7日10時50分発行